「異文化」とは何か
—日本異文化研究会の英語表記の一考察—

佐々木　隆

プロローグ

「異文化」とはどういうものであるか、そしてそれをどう表現するかについて考察していみたい。特に、一般論としての「異文化」から、日本異文化研究会が意図する「異文化」との根本的な違いについて触れ、さらには、それを英語表現にしたときにどのような違いが出て来るかにも注目していきたいと思う。

1　一般論としての「異文化」

一般的に「異文化」の意味を調べると次ぎのようになる。新村出編『広辞苑』（第5版、岩波書店、1998年11月）には「生活様式や宗教などが（自分の生活圏と）異なる文化」と定義されている。また、インターネットでは、学問的裏付けは必ずしも十分ではないが、広く利用されているフリー百科事典『ウィキペディア』(http:wikipedia.org/wiki/%E7%95%B0%E6%96%87%E5%8C%96、2006年10月25日)には、「異文化（いぶんか、different culture）とは、ある人が所属する文化と異にする文化をさす。どこまでを異にするということについては、民族の単位で見たり、地域の単位、果ては家族の単位で見るため、一概に言えない。しかし、宗教の相違、風俗の相違、人種の相違などで見られることが多い。経済・社会のグローバル化が進む今日、異文化を知ることは重要になってきている。」と定義されている。これらの定義ではいわゆる「国家」とか、外国との比較といった意味合いではなく、「異文化」とは文字通り「(自分の生活圏と)異なる文化」ということである。

2　日本の中の「異文化」

日本異文化研究会の名称に使用されている「異文化」とはどのような意味であろうか。『日本の中の異文化』（第１号、2005 年 12 月）の中で中野栄夫氏は次のように述べている。

「日本の中の多文化」という表現は、同様な表現ではありますが、たんに色々な文化がありますというニュアンスが強いと思います。あえて「異文化」と言うのは、相互の異質性・独自性を認め、その上で相互の関連を理解しようとしたいからです。(1ページ)

「異文化」と言うのは、「相互の異質性・独自性を認め、その上で相互の関連を理解すること」というのは、基本的には前述の『広辞苑』の定義と同様である。

3 「異文化」の英語表記

「異文化」は「異」+「文化」から成り立つ言葉である。これをそのまま英語で直すと、'different culture'ということになる。では他の表現はないのだろうか。'different culture'と同じような考え方から'other culture'という表現もある。また、'cross-culture'という表現は以前はかなり使用されていたが、現在では'interculture'という表現が多く見られる。学会等の英語名称とそのおもな趣旨を見てみよう。

Intercultural Communication Institute
異文化コミュニケーション研究所(神田外国語大学)
設立趣旨

世界各国の急速なグローバル化に伴い、異なる文化、国家、民族間の相互理解を深め、円滑なコミュニケーションを促進するための研究がわが国でも緊急の課題となっています。

Intercultural Communication Institute
異文化コミュニケーション研究所(アメリカ)

The Intercultural Communication Institute (ICI) is a private, nonprofit foundation designed to foster an awareness and appreciation of cultural difference in both the international and domestic arenas. ICI is based on the beliefs that 1) education and training in the areas of intercultural communication can improve competence in dealing with cultural difference and thereby minimize destructive conflict among national, ethnic and other cultural groups; and 2) we therefore share as ethical commitment

to further education in this area.

Society for Intercultural Education, Training and Research
異文化コミュニケーション学会

異文化コミュニケーション研究会は、一個の独立した機関である。と同時に、世界の各地域に散在するそれぞれ独立した SIETAR（異文化コミュニケーション教育・訓練・研究会の略称）組の NGO 連盟である SIETAR グローバルネットワークに所属している。

The Japan Society for Intercultural Studies
日本国際文化学会
「日本国際文化学会」設立趣意書

国際文化学という言葉そのものは、かならずしも一つの学問的分野として定着してはおりませんが、現在では、大学の学部・学科単位の名称として多く用いられているだけでなく、急速な国際化の中での文化現象の研究・教育のあり方を考える枠組みとして、さまざまな分野でその必要性が認識されつつあるものです。そのような学際的な研究・教育のための議論の受け皿として、こうした学会を設立することに広くご賛同が得られれば幸甚であります。

Intercultural Education Society of Japan
異文化間教育学会
異文化間教育学会の趣旨

異文化間教育学会は、1981年1月に下記のような趣旨の下に、関係分野の研究の促進のために有志によって設立された学会です。本学会の趣旨は、異質な文化の接触によって生ずるさまざまな教育の問題を学問対象として取り上げ、その研究を促進しようとするところにあります。異文化間の接触によって生じる問題の研究は、必ずしも新しいことではありませんが、近年、各分野での国際化が進むにつれて、それに伴って生じるさまざまな問題を、「異文化接触」「文化摩擦」「異文化間研究」といった概念と方法の下に、学問的に取り上げようとする傾向がみられます。

上記以外には「多文化関係学会」（Japan Society for Multicultural

Relations)、「生物多様性研究会」(Biodiversity Soceity) といった表現も気になるところだ。立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科の英語表現は Intercultural Communication を使用している。

上記でいくつか見てきたが、「異文化」をはっきりと示している、Intercultural Communication Institute (異文化コミュニケーション研究所・アメリカ) の 'cultural difference in both the international and domestic arenas' の表現は注目してよいだろう。

また、ユネスコの文化の多様性から異文化理解を考えると、'diversity' という表現も気になるところである。さらに、気になる組織として The International Network for Cultural Diversity がある。以下組織の内容については、ホームページより引用しておきたい。

> Who are are:
> The International Network for Cultural Diversity (INCD) is a world wide network of artists and cultural groups dedicated to countering the homogenizing effects of globalization on culture.

上記で取り上げた 'diversity' という表現は日本語では「多様性」という訳語が当てられる。2001 年 11 月に採択されたユネスコの「文化の多様性に関するユネスコ世界宣言」(UNESCO Universal Declaration on Cultural Diversity) でも使用されているだけに「異文化」と「文化の多様性」という概念には違いがあるにせよ、「異文化」の英語表現を考える際に、抑えておくべきだろう。

4 ユネスコの「文化多様性」

ここでユネスコの「文化多様性」(cultural diversity) についてはホームページを見てみたい。

Global Alliance for Cultural Diversity

> UNESCO's Global Alliance for Cultural Diversity explores new ways to turn creativity
> in developing countries into sustainable cultural industries. It aims to promote cultural

diversity, support economic development and encourage job creation in a range of fields including music, publishing, cinema, crafts and the performing arts.

［訳］　**文化の多様性のためのグローバル・アライアンス**
文化の多様性のためのユネスコのグローバル・アライアンスは、発展途上国の創造性を持続可能な文化産業に変える新しい方法を探究することである。それは、文化の多様性を促進し、経済発展を支援し、一連の音楽、出版、映画、造形技能、舞台芸術の分野の労働場所を助長することになる。

さらに、注目すべきは、2001 年 11 月に採択されたユネスコの「文化の多様性に関するユネスコ世界宣言」（UNESCO Universal Declaration on Cultural Diversity）であろう。その第 1 条を見ておきたい。

Article 1　Cultural diversity: the common heritage of humanity
Culture takes diverse forms across time and space.　This diversity is embodied in the uniqueness and plurality of the identities of the groups and societies making up humankind. As a source of exchange, innovation and creativity, cultural diversity is as necessary for humankind as biodiversity is for nature. In this sense, it is the common heritage of humanity and should be recognized and affirmed for the benefit of present and future generations.

［訳］　第 1 条　文化の多様性：人類共通の遺産
文化は時間・空間を越えて多様な形を取るものであるが、その多様性は人類を構成している集団や社会のそれぞれの特性が、多様な独特の形をとっていることに表れている。生物における種の多様性が、自然にとって不可欠であるのと同様に、文化の多様性は、その交流・革新・創造性の源として、人類にとって不可欠なものである。こうした観点から、文化の多様性は人類共通の遺産であり、現在および未来の世代のために、その意義が認識され、明確にされなければならない。

ここではいわゆる「国際」とか「国家」という表現は使用されていない。

ここにあるのは、‘time and space’であり、‘the groups and soceity’なのである。

エピローグ

一般的に「異文化」＝「外国文化」、従って「異文化理解」＝「国際理解」といった図式が出来上がっていることが大きな問題である。外国文化は異文化の一部であり、国際理解は異文化理解の一部であることを本来ならば認識しなければならない。

「文化」を「知識、信仰、芸術、道徳、法律、慣習、その他およそ人間が社会の一構成員として習得した能力や習慣の複合的な全体」とするなら、気候、風土、民族、宗教、言語等により生活習慣が地域による異なる文化はまさに「異文化」である。日本異文化研究会の言う「異文化」という観点は、国際文化交流的な意味というよりはユネスコのいう意味合いの方が近い考え方である。国際文化交流的な意味合いではどうしても「日本の中の異文化」＝「日本の中の外国文学」というニュアンスが強いからだ。これは、「異文化理解」＝「国際理解」という単純な図式と同一である。これらは英語表記にすれば、その違いはよりはっきりしてくるのではないだろうか。学会名等で使用されている“interculture”という表現は、他国との文化との違いを強く意識させるものであり、日本異文化研究会の「異文化」と意味するところとは意味合いが異なる。また、ただ単に「日本の中の多文化」ということになれば、Multiculture in Japanということになろうだう。しかし、これは中野栄夫氏の「日本の中の異文化」の考え方とは異なることになる。沖縄から北海道まで、単純に文化が沢山あるという多文化主義ではない。とすれば、日本異文化研究会の英文表記は何が一番ふさわしいのかを考察すると、ユネスコの考えに基づき、cultural diversityという表現を生かし、The Cultural Diversity Society of Japan、あるいはThe Society for Cultural Diversity in Japanあたりが最もすっきりするのではないか思われる。そこには、相互の文化の異質性と独自性を認めながら、相互の関連性を理解しようとする姿勢があることから、「日本の中の多文化」ではなく、「日本の中の文化の多様性」を追究するという考え方であるので、The Society for Cultural Diversity in Japanという英語表記がもっともふさわしいかもしれない。

参考資料

「The Global Alliance for Cultural Diversity」（http://portal.Unesco.org/culture/en/ev.php-URL_ID=244B8&URL_DO=DO_TOPIC&…）
「UNESCO UNIVERSAL DECLARATION ON CULTURAL DIVERSITY」
(http://www.unesco.org.jp/meguro/koen/dec-cul.divs.htm)
「異文化コミュニケーション研究所」(http://www.kuis.ac.jp/icci/)
「International Communication Institute」
(http://www.intercultural.org/)
「異文化コミュニケーション学会」
(http://www.sietar-japan.org/jp/about/mission.html)
「日本国際文化学会」
(http://www.world.ryukkou,ac.jp/~wwjscsm/indexl.htm)
「Cultural diversity」(Wikipedia.
http://en.wikipedia.org/wiki/Cultural_diversity)
「International Nework for Cultural Diversity」
(http://www.incd.net/about.html)

日本の中の異文化　第３号

発　行　日本異文化研究会
発行日　2007年3月15日

〒193-0833　東京都八王子市めじろ台1-38-11
中野　栄夫　方
e-mail ： ibunkaken@yahoo.co.jp